



白石城を守る形で建てられている大砲像（二の丸公園）

青年会議所にいろいろな方々がいらっやいました。とにかく大変誇りに思っていましたというところが一つ。東北の方というのはすごく熱心であることもよく存じ上げておりましたけれど、我がこのようにやっていらした。

また、あれを制作させていただきましたときに、一番お世話になりましたのは両国の相撲博物館の方です。学芸員の方や館長さんが大変熱心で、いろいろご指導いただきました。また、お相撲を引退なさった方が実際に自分でまわしを締めて見せてくださいました。そうやって伺っています間に、相撲界の中の礼儀とか古いしきたりのようなものが、ああこういうふうにながされて保たれていくんだなというのがよくわかりました。逆に私の方がずっと楽しませていただいたお仕事でした。

それから、据える場所は正直なところ少し迷いました。あそこに大きな石碑がございました。あれ



大砲像の制作に当たる中村氏

と並べますと、どうも様にならない。ちよつと反対側に道を一本つけていただいで、お城を守るような姿にしたいと思ひましてあの場所にと申し上げましたら、市長さんもよかるうということになりまして決まりました。そして桜のこ



ますと、源頼朝公などのああいっや肖像彫刻になり、それが江戸時代に入りまして、日光東照宮みたいなものもありましたけれど、大体普通の彫刻といえますと、たばこの根つけとか工芸みたいなものが主流になります。この付近がいわゆる彫刻の暗黒時代で、それが明治の初期にラグーザという人がやってきて日本に塑像を教えるわけです。そういうところから、いわゆる

西洋彫刻が入ってきて現在の日本があるんだらうと思ひます。都市や建築なども変化してまいりまして、その中に彫刻が進出し、本当に楽しんでいただく文化の時代にこれからはなるのだらうと思ひます。楽しめるということがもし文化だとするならば、いろいろな形で楽しめるいいだらうなと思ひます。

### 社会生活の中で 芸術を楽しもう

川井：二十世紀の文化というのは、物の豊かさを求める文化だった。だから文化というよりも文明なんですね。文明というのは、発明、発見を重ねることによって生活が豊かになる、便利になる。ですから普遍性を持つわけで、世界中にばつと同じ文明が広まっています。しかし、文化というのは逆に精神的なものが大きい要素を占めますから、個性的なものです。二十一世紀はそういう意味での文化の時代になりつつあると。心の豊かさを求めるということ自体がそういうことでしょうか。

その意味で、二十一世紀の彫刻というものはどういう形になっていくのでしょうか。中村：非常に難しいお話だと思ひますけれど、現在はコンテンツブローリアー（注2）の時代だとよ

く言われます。結局それ自身も自己表現には違いありません。

この前、私はフランスで展覧会をさせていたときに、新聞社とか雑誌社、評論家、いろいろな方々と共同記者会見をやったんですが、今、芸術がどつちを見ていくかわからない、そういう嘆きが多かったんです。その言葉の中に「あなたはロダンの再来か」とか言われたりしましたけれども、そういうことではなくて、私たちはひとり歩きではなくて一般の人々と一緒に歩いているわけですね。一般の悲しみは私の悲しみであるし、一般の喜びは私の喜びでもある、ということがそのバックボーンにあるわけです。そういう立場に立って、芸術をお互いに楽しもう、文化ではなくて楽しみというところになるかどうかよくわか

りませんが、そういうふうには私自身は考えております。

ただ、先ほど申し上げましたように、どうしても自分の言葉が表に出ていなければ、ちよつと芸術とは言いにくいかなという気がしております。

川井：自分の言葉、これが一番大事なこと、だから個性ということの近きに相馬焼があります。その職人は見事なぐらゐの技術を持っているんですが、個性は全くないですね。あれはやはり職人芸であって、決して芸術ではないのだらうと思ひます。

中村：大体私の申し上げたいことと同じようなことを、今おっしゃいましたね。

川井：作品に作家の言葉・精神が表に出ているものでなければ、芸術とは言えないというお話をいただきましたが、作品をまちづくりということに置き換えて考えますときに、作家の言葉・精神というのは市民の提言やプライドということになるのだらうと思ひます。

二十一世紀の白石は、市民の提言や意見を引き出しながら、市民総参画で文化の薫る品格のあるまちづくりを進めていきたいと思っております。

本日はありがとうございました。

(注2)現代芸術

らになつたら、像がきれいに見えるよと市長さんから言われてほつとしたのが本首でございます。川井：現在、パイパス側の駐車場の方から登つてくる観光客が多いものですから、登り切ったところであの像がばつと目に付きます。まさに先生がおっしゃった、お城を守るという形で置かれました。お掃除のおばさんは、みんな土足で上がって、背比べをして記念写真を撮られるので、土台石が泥だらけになつて困るとくどいていますが、しかしそれだけいろいろな方に愛されるというのは、私ど

### 彫刻の歴史から 楽しみ方はいろいろな形で

川井：最近、彫刻のある町とか、彫刻の森とか、例えば仙台市の定禅寺通りにぼつぼつと彫刻が置いてある。それから札幌市も彫刻の森ということであるいろいろな彫刻を置いています。そのほかにもございますね。あれは何年前から出てきたんでしょうか。

中村：一番最初は宇部市が野外彫刻展なるものを始めたように思ひます。これは定かではありませんが、昭和三、四十年ころだったでしょう。仙台が置いたのは割合早いです。それが広がっていったことは事実です。街頭にあるのと、それから公園あるいは彫刻公園、この三種類の方法があるよう

も大変うれしいことです。中村：あれは等寸像、同じ大きさにしてありますので、大砲つてこんなに大きかったんだと、あれで実感はしていただけますね。川井：当時は一五五五でいわゆる兵隊の甲種合格という時代のあの大きさですから、二五五という大きさは本当にすごい巨人ですよ。中村：相撲というのは、もともとはお殿様に見せたとか、何かそういうこともあったでしょうし、場所としては素晴らしい場所に置いていただいたのではないのでしょうか。

す。ヨーロッパですとバリ万博ころから彫刻公園がアントワープにありましたので、その歴史は古いだらうと思ひます。

川井：ヨーロッパでは建物と彫刻というのは切つても切れない感じですが、日本では切り離しているといいますが、設計家が彫刻のことがよくわからないために、彫刻と建物が一体になっているという感じよりも、建物の中の一ツのアークセサリーのドーンと彫刻が置いてあるという感じがございますね。

中村：日本の彫刻そのものの歴史を考へてみますと、彫刻というのは仏像彫刻が飛鳥時代から入ってまいります。それから鎌倉に入り

